

国際シンポジウム総括報告

松本 久史

『古事記』の伝承が貴重な国民的財産と認識されるようになったのはいつからか。この問い自体がきわめて近代的な発想に源を発している。研究史の見地からは、本居宣長『古事記伝』以降の形成であると考えられるであろう。さらに言えば明治維新以降の国民国家形成過程において、文字通りに「国民的」な地位を得たといっても過言ではない。重要な要素として、近代的な学校教育の中で『古事記』を含めた日本神話が教材として取り上げられていき、『古事記』は国民的な古典としての地位を確固たるものとしていくのであるが、その歩みも一様ではなかった。近年の学習指導要領において、日本の神話を取り上げることが明文化されて以来、教育現場においては神話をどう教えるべきかの議論、また実践についての取り組みが行われるようになったが、解決すべき課題は多い。

「古事記学」事業における令和元年度国際シンポジウム「神話・伝承の教材化と実践―『子ども古事記』がひらく世界―」は、本事業の一環である『子ども古事記』の制作をはじめとした『古事記』のこども向けの教材化を一つの切り口として、神話や伝承が地域や社会においてどのように語り伝えられてきたか、教育の現場でどのように実践されてきたのかをテーマとした。

令和元年十月二十六日（土）、國學院大學渋谷キャンパス学術メディアセンター一階常磐松ホールにて開催した「神話・伝承の教材化と実践―『子ども古事記』がひらく世界―」の当日の進行は以下の通りである。

日時…令和元年十月二十六日(土) 十三時～十七時三十分

場所…國學院大學渋谷キャンパス学術メディアセンター一階常磐松ホール

定員…三〇〇名(事前申込制・入場無料)

主催…國學院大學古事記学センター／後援…公益財団法人日本文化興隆財団

【開会挨拶】

針本正行(國學院大學学長／文学部教授)

【パネリスト】

「国語科教育と神話・伝承」／吉永安里(國學院大學人間開発学部准教授)

「教育・保育の素材のための古事記神話の再話について考える」／原田留美(東京都市大学人間科学部教授)

「日本神話を伝える方法と対象を考えて」／シャロンドン・エミリア(元関西学院大学非常勤講師)

「現代インドにおける説話の伝承…子どもパンチャタントラの構成と内容」／岩瀬由佳(國學院大學文学部教授)

【討議司会】

成田信子(國學院大學副学長／人間開発学部教授／同学部長)

【「日本神話イザナミ語り」】

小山茉美(声優・ナレーター)

青葉雅楽会(國學院大學サークル)

【総合司会】

松本久史（國學院大學神道文化学部教授）

シンポジウムの概要

四名のパネリストの発題のうち、前半の吉永・原田両氏は、教育現場における神話や伝承の教材化と実践の課題がテーマとなった。

吉永氏からは、「国語教育と神話・伝承」という題で、小学校における「稲羽の素戔」を教材とした授業実践についての紹介と、神話伝承の国語科教育の教材にするにあたっての課題に言及があった。教科書ごとの構造・内容・表現の異同を指摘し、小学校低学年向けの授業を行う際の教材の活用の方法について、現場での実践例の提示がなされた。発達段階に応じた教材の作成と授業の実践の工夫につき、「稲羽の素戔」を例とした場合、「わに」や「しろうさぎ」をどう理解し、表現するかの取り組みにはさまざまのアプローチがあるが、原典理解とともに、挿絵を含めた伝え方の問題があり、子どもたちのわかりやすさと原典の理解とをどう調和させていくかが課題であることが示された。

つづく、原田氏からは、「教育・保育の素材のための古事記神話の再話について考える」という題で、現在の『古事記』研究の状況を踏まえ、幼児・児童が『古事記』神話に親しむための工夫について論じられた。『古事記』はただの神話ではなく、政治的な意図をもって作成されたものであるが、それはあくまでも古代の政治であり、近代の政治と直結させて理解することは必ずしも適当ではないことや、研究者からは『古事記』をわかりやすく再話すること

自体の疑義は示されてはいるものの、教育の場において『古事記』の再話は有効であるとの見解を示したうえで、想定読者の発達段階やねらいを意識し、物語の長さや複雑さへの配慮、原典の姿の伝え方、各再話作品の特徴を知った上で、教育・保育に生かす、解釈等の正確さに留意するという四点の必要性が提示された。

次いで、シャロンドン・岩瀬両氏からは、教育における神話の取り扱いに関する国際比較の見地から、『古事記』を教育の現場で教材化し実践するにあたっての諸問題についての提起がなされた。

シャロンドン氏からは、「日本神話を伝える方法と対象を考えて」という題で、必ずしも『古事記』のみにこだわらずに、日本神話を世界の神話の一つとして位置づけることの有効性が述べられ、それを踏まえたうえで神話を現代に伝える為に、異伝の紹介、再話、神話題材の物語紹介等の工夫をするべきではないかという方法論上の提言がなされた。また、神話伝承の教育に最適な対象はむしろ大学生ではないかとし、世界の神話を背景に自国の神話を大学生に「考察」させることの必要性も論じられた。

岩瀬氏からは、「現代インドにおける説話の伝承・子どもパンチャタントラの構成と内容」という題で、インドのサンスクリット語説話集『パンチャタントラ』とは何か、子ども向けにどのように書き換えられているかについての発題があった。パンチャタントラは古事記同様に原典ではなく子ども向けに簡易化された文章で流布しており、簡易化に伴う枠物語形式からの構成の改変や、話の特徴について分析を行った。日本同様に多神教的な環境にあるインドにおける神話の取扱いについての重要な示唆がなされた。

パネル発表後のディスカッションでは、成田氏を司会進行として、子どもたちが神話を学ぶ意義や神話の教材化と実践、『こども古事記』の構成や対象年齢などについて議論が行われた。そして、子どもの発達段階に合わせて古事記

の再話をすることの重要性や、原典との解釈の相違と子どもたちの想像力への影響を考慮した上で、挿絵を用いることの是非などに関する意見が交換された。会場からの質疑では、教育現場において実践に従事する教員からの質問があるなど、活発な質疑応答が行われた。

なお、シンポジウム後半には、日本神話の読み語りの実践として、声優の小山茉美氏による「日本神話イザナミ語り」が行われた。本学雅楽サークル「青葉雅楽会」の伴奏のもと、『古事記』の語りが天地の始まりから天孫降臨まで、約一時間にわたり実演された。『古事記』を子どもたちに伝えていく方法の多様性に関し、理解を深めることが出来た。

当日は約一七〇名の来聴があり、令和元年度国際シンポジウムは盛況のうちに幕を閉じた。

成果と課題

本シンポジウムのテーマを鑑み、国際シンポジウムのポスター・チラシを文学や児童教育に関わる大学・機関や各小学校の教員、国語研究会に送付して、教育関係者を中心に告知を行ったこともあり、小・中学校の教師など教育現場に携わる人たちの参加が見られたことも、シンポジウムの趣旨にかなったものであった。

以降の展開については、『こども古事記』の作成にあたって、本シンポジウムでも取り上げられた、対象年齢の発達段階に応じた文章の作成などを念頭に置きつつ、それを反映することにつとめたことなど、本文の作成に資するところが多かった。

さらに、子ども向けの『古事記』の読み物については、谷口雅博センター長が監修した、ふしみみさを…文、ポール・コックス…絵『日本の神話えほん 1 あまのいわや』・『日本の神話えほん 2 やまたのおろち』（岩崎書店 令和二年）、参画教員の渡邊卓『こんなにおもしろい日本の神話1 天地の始まり編 アマテラスほか』、『こんなにおもしろい日本の神話2 地上の神々編 オオクニヌシほか』、『こんなに面白い日本の神話3 英雄の冒険編 ヤマトケルほか』（いずれも汐文社 令和三年）が刊行された。研究の最前線の成果を生かしつつ次世代の子どもたちに『古事記』を伝えていこうとする本事業の目的については、一定の成果を見せたと考えられ、本シンポジウムはそれらに大きく寄与したと言えよう。